

〈翻 訳〉

センチメンタル ジャーニー (Ⅳ)

——フランスとイタリーを巡るヨーリック師の旅——

ローレンス スターン作

小 林 亨 訳

フュードシャンプル
小間使い⁽¹⁾

パリ

あの老フランス士官が旅行について語ってくれたことは、ポローニウスが息子に与えた旅行についての忠告をわたしに思い出させたが——その忠告は「ハムレット」を聯想させ、次に「ハムレット」はシェークスピアのほかの全作品を聯想させたので、宿に帰る途中、その全集を買おうと、わたしはコンティ河岸に寄ってみた。

本屋の主人は、一セットもありませんと言ったので——「何を言うんだ！」とわたしは大声で言うと、勘定台とわたしの間においてあった全集の一揃の中から一冊を抜き出した——本屋が言うには、この全集は製本するために私どもがおあづかりしたもので、明朝にはヴェルサイユのB……伯爵様にお届けすることになっているんです、とのことであった。

——それでB……伯爵はシェークスピアをお読みになるのかい、と訊ねると『伯爵様は自由思想をお持ちでして』と本屋は答えた——伯爵様はイギリスの書物がお好きで、その上御立派なことにイギリス人もお好きなんです。君はずい分お世辞がうまいんだね、とわたしは言った、君のお世辞ぢやイギリス人はルイ金貨一、二枚を店におきたくなるよ——本屋は一礼すると何か言おうとしたが、その時二十才位の品のいい娘が店に入って来た、その娘は物腰や服装からするとどこかの信心深い上流階級の婦人に仕えている小間使いのように思われたが、クレビヨンの「心の迷い、^{レゼルガルマン デュクール デレスブリ}気のさまよい」がほしいと言った。本屋が

すぐに本を渡すと、彼女は同じ色のリボンで口をしめた小さな緑色の財布を取り出し、人差指と親指をその中に入れてお金をつまむと代金をし払った。わたしは別にそれ以上その店に用事もないので、わたし達は一緒に本屋の店を出た。

——ねえ君、「心のまよい」を買ってどうするの、わたしは彼女に言った、君なんてまだ心が自分にあるかどうかも分らないだろうに。恋が君に初めて心のあるのを教えるとか、誰か浮気な羊飼いが君の心を痛ませるとかしないうちは、恋心があるかどうかも分らないだろうに。——『ああ神様お救い下さいませ！』と彼女は言った——ほんとにそうだね、とわたしは続けて言った、もし君の心が善良な心だったら、盗まれるのは残念だからね。心というものは君には小さな宝物で、君の顔を真珠で飾りたてるよりも、ずっと美しく君の顔を装おうものなんだよ。

その若い娘は、リボンのついたしゅすの財布をずっと手に持ったまま、神妙にわたしの話を聴いていた——これはずい分小さいものだね、と財布の底を持ってわたしが言うと——彼女はそれをわたしの方に差し出した——それに中身もほとんど入ってないじゃないか、でも君が美しいように心を美しくすれば、神様が一杯にして下さるよ。わたしはシェークスピア全集を買うためにクラウン銀貨を何枚か持っていたが、彼女が財布をまったくわたしにあづけたので、その一枚を中に入れてリボンを蝶結びにすると、財布を娘に返した。

娘は普通のお辞儀よりももっと腰をこごめて丁重にお辞儀をしたが——それは心全体が身をこごめるような静かな感謝に満ちた礼であって——体は心の礼を語るだけであった。わたしは生れてこの方、娘に銀貨を一枚やってこのような喜びの半分も味わったことはなかった。

わたしの忠告なんか、この銀貨をつけてやらなくちゃ一文の値打ちもないんだよ、とわたしは言った、でも君がこの銀貨を見れば、わたしの忠告を思い出してくれるだろうね——だから君、リボンなんか買わないように頼むよ。

そんなこと絶対にしませんとも、旦那様——娘は熱心に言って、ささやかな信義にもとづく約束につきものだが、わたしに彼女の手を与えた——『旦那様、このお金は別にしまっておきますわ』と彼女は言った。

一つの道義的約束が男と女の間に関わされた時には、それは男女のどんなひめやかな散歩さえも神聖なものにするのである。そこで夕闇が立ちこめていたけれども、わたし達の行く道が同じ方向だったので、二人は一緒にコンテイ河岸を堂々と歩いて行った。

彼女は歩き出した時わたしに二度目のお辞儀をしたが、本屋の店からまだものの二十メートルも行かないうちに、まるで言い足りなかったかのように、ちょっと立ち止まるふりをして——もう一度感謝の言葉を繰り返したのである。

あれは美しい心を持つ人にやらないではいられないささやかな贈物なんだよ、とわたしは彼女に言った、だからわたしがあげた人には決して思い違いをしたくないんだ——でも君は純真さが顔に現われている——この純真な心を誘惑しようとする男の上に災が振りかかりますように！

その娘はわたしの言ったことになにか感動した様子で——低くため息をついたが——わたしはなぜか訊ねてみる気にはなれなかった——それで、ネヴェール街の角に着くまで何も言わなかったが、そこがわたし達の別れなければならぬ地点だった。

——これが君、モデーヌホテルへ行く道なんだね？ とわたしは訊ねた、彼女は、その通りですと答えて——或いは次の角を曲ってゲネゴール街を通っても行けますと言った。——それならゲネゴール街から行こう、とわたしは言った、理由は二つあるんだ、一つはその道を行ってみたいからで、もう一つは出来るだけ遠くまで君を護ってあげたいからね。娘はわたしが親切であることが分ったらしく——モデーヌホテルが聖ピエール街にあるといいんですのに、と言った——君はそこに住んでいるの？ とわたしは訊ねた——彼女は「R……夫人の小間使いなんです」と答えた——こりゃ驚いた、とわたしは叫んだ、R……夫人は、わたしがアミアンで手紙を届けるように頼まれたその女性じゃないか——娘の言うには、R……夫人は誰か知らないが手紙を持ってくる人を待っていて、もう待ちくたびれている様子であるとのことであつた——そこでわたしは、その娘にR……夫人に呉々もよろしくとの挨拶と明朝必ずお伺いする旨の伝言を頼んだのであつた。

こういう話をしながら、わたし達はネヴェール街の角にじっと立っていた

——それからまた彼女が「恋心」の本を手を持っているよりもっと持ちいいようにする間、しばらく立ち止っていた——その本は二巻本だったので、彼女が上巻をポケットに入れる間、わたしが下巻の方を持っていてやった、それから彼女がポケットを支えていたのでそこへわたしはその一冊を入れてやった。

なんて見事によられた糸がわたし達の愛情を結びつけているのかと思うと、心から浮き浮きと楽しかった。

二人は再び歩き出したが、彼女が三步踏み出した時わたしの腕に手をかけてきた——わたしも丁度そうするようにとおもうとしていた矢先だったが、彼女はその時わたしと始めて出会ったことなぞ念頭にないように、わだかまりなく卒直に自分からそうしたのであった。わたしとしては、彼女との血縁の近かさを非常に感じたので、横を向いて彼女の顔を見つめ、縁者として似かよったところがあるのではないかと、確かめずにはいらなかった——ちえっ！ とわたしは独りごちた、人間みんな親類ぢゃないのか？

ゲネゴール街の曲り角についた時、わたしは彼女にいよいよ別れの挨拶をするために立ち止まった。娘はわたしが同行してくれたことと、親切だったことにもう一度感謝したかったのだろう——二度繰り返してさよならを言った——わたしも同じようにさよならを繰り返した、そしてわたし達の別れはまったく真心のこもったものだったので、これがどこかほかの所でおこったものならば、わたしはおそらくキリストの使徒のように温かで神聖な愛の口づけをして、わたし達の別れを祝福したかも知れない。

しかしパリでは男同志でないと接吻をしないので——わたしは接吻をしたのと同等のことをした——

——神よ彼女に御恵みを垂れ給え、と祈ったのである。

旅券

パリ

ホテルに帰ると、ラフルールは警部補がわたしを調べにやって来たことを告げた——これはしまった！ とわたしは叫んだ——警察がやって来た理由は明白だったのである。そして読者にもお知らせすべきである、というのは、事の

起った順序に従えばその事は省略されていたからで、ただしわたしがそれを忘れていたわけではなくて、もしその時話していれば、今はもう忘れられてしまっていたかも知れない——そこで今が是非お話したい時なのである。

わたしはまったくあわててロンドンを出発したので、イギリスがフランスと戦争をしていることをすっかり失念していて、ドーヴァーに着きブローニュの向うに見える山々を望遠鏡で眺めた時、初めてそのことが思い浮び、それと関連して旅券がなくては彼の地に行けないことに気が付いた始末であった。たとえ通りのはづれ位の近くまででも、一旦出掛けた以上は、行った時よりいくらかでも利口になって帰ってくるのでなくては、わたしは到底がまんが出来なかった。しかもこの旅行は、見聞を広めようと、わたしが今までになく努力したものだだったので、尚の事手ぶらで帰ることなど出来なかった。そこで某伯爵が便船を貸り切ったのを聞くと、わたしは「随員」の一人に加えて頂くよう頼み込んだのである。伯爵はわたしのことを多少知っていたので難なく許してくれたが——ただ一言次のように言われた、ブラッセルを通過してパリへ行く予定なので、カレーまでしか面倒をみてやれない、しかし一旦カレーに着いてしまえば、そのあとは支障なくパリへ行けるだろう、けれどもパリでは君は友達を作ってなんとか自分でやりくりをつけていかなければならない——伯爵様、どうかパリに行けるようにして下さい——そうすればうまくやって行きますから、とわたしは言った。そこでわたしは乗船し、それきり旅券のことなど忘れてしまったのである。

ラフルールが警部補の調べに来たことを知らせてくれた時——すぐにこの事が思い浮んだが——彼が一部始終を語りおえないうちに、宿の主人がわたしの部屋にやって来て同じことを話し、特に警部補がわたしの旅券のことをきいていたとつけ加えて言った。そして主人は、旅券をお持ちなんでしょうね、と最後に訊ねた——ところが持ってないんだよ！ とわたしは答えた。

わたしがこう言うと、宿の主人は、まるで疫病やみから逃げるように、わたしから三步後にさがった——ところがラフルールはわたしの方に三步近づいて来たが、その動作は善良な人間が困窮している者を救おうとするかのようなようであった——わたしの心はこの男の魅力のとりこになったが、そのたった一つの特

性から、わたしは彼の全人格が分り、何年も忠実に仕えてくれているかのよう
に、彼の人間に全幅の信頼をおいたのであった。

『こりゃ何としたことだ！』と宿の主人は叫んだが——叫ぶと同時に気を落
ち着けて、すぐに言葉の調子を変えて言った——旦那様が（アパラマン）ほん
とに旅券をお持ちでないんでしたら、旅券をとって下さるとなたかお友達がパ
リにいらっしゃるんでしょ——全然心当りがいいね、わたしは素っ気ない態
度で言った——それなら「ほん^と」に旦那様は「すくなく^{とも}」バステューユ
かシャトレーに送り込まれますですよ、と彼は言った。そう、でもフランス王
は心の優しいお方だから——誰にも危害をお加えにはなるまい——『それとは
話が違います』と主人は言った——きっと明日の朝、バステューユへ送られま
す。——でもわたしは君の宿に一ヶ月泊ることにしたんだ、とわたしは答えた、
だからフランスの王様が何んと言われようと、一ヶ月を一日だって縮めること
はしないよ。するとラフルールがわたしの耳元に口をよせて、誰もフランスの
王様には逆らえませんです、とささやいた。

『いやはや、イギリスの旦那様方は途方もない人達だ！』——と主人は呟く
でもなくののしるでもなく言い捨てると——部屋から出て行った。

旅券

パリの旅宿

わたしは自分の悩みの種を深刻な顔付きで思いつめることで、ラフルールの
心を苦しめる気にはなれなかったが、それがこの問題を平然と扱った理由であ
った。そして殆んど気にもとめないことを彼に示すために、わたしは旅券のこ
とはまったくそれなりにしてしまっ、彼が夕食の給仕をしている間も、普段
よりもっと陽気にパリやオペラコミック座の話をした。——ところがラフルー
ルは、自分でもそこへ行って来たのであって、街々をずっとわたしの後をつけ
て本屋の店まで行ったのだが、わたしが若い小間使いと出て来て一緒にコンテ
イ河岸を歩いて行くのを見て、これ以上ついて行く必要はないと思い——そこ
で彼なりに判断して近道を通って帰ったのだが——宿に着くとわたしが帰るの
に先立って警察が調べに来たことを知らされたのであった。

この正直な男がさがって自分の夕食を食べに階下へおりて行くと、すぐにわたしは自分の立場をすこし真面目に考え始めた。――

――ところでユージュニアスよ、わたしが旅行に出発する時わたし達の間で交わされた短かい対話を思い出して、君はほほえんでいるだろうね――それをここに書いてみなくてはいけない。

ユージュニアスは、わたしが旅の苦勞を考えないように旅費の心配も殆んどしていないのをみてとると、わたしをわきに連れ出して、どの位金を用意しているのかと訊ねた、それでわたしが正確な金額を話すと、ユージュニアスは頭を振って、それだけじゃだめだ、と言い、自分の財布を取り出しわたしに全部あけて呉れようとした――ユージュニアス、ほんとにこれでたくさんなんだよ、とわたしは言った――いやヨーリック、充分じゃないよ――わたしは君よりもフランスとイタリーのことをよく知ってるんだ、と彼は言った――それでも彼の申し出を断わって、次のように言った、でもユージュニアス、わたしはパリに三日としないで、バステューにぶち込まれるようなことを何か言ったりしようと思ってるんだ。そうすれば費用はフランスの王様持ちで二、三ヶ月暮せるだろうから――これは失礼、と彼は素っ気なく言った、そういう方法をすっかり忘れていたよ。

さて、わたしが気楽にあしらっていた事態が、重大なものとなって我が身のしかかって来たのである。

結局ラフルールが階下へおりて行って独りきりになると、わたしはあの時ユージュニアスに話したことのほかに何も思いつかなかったのは、わたしの愚かさによるものか、無関心によるものか、あきらめの考えによるものか、頑固さによるものか――それともわたしの内にある別の性癖によるものなのだろうか？

――そしてそのバステューについてだ！ 恐怖感がこの言葉にはある――わたしは独り呟いた、バステューという言葉はどんなにうまく使っても、城塞のことを言っているに過ぎないし――城塞というのは、外に出られない家という意味に過ぎない――痛風患者は気の毒なものだ！ 年二回は牢獄生活を送るようなものである――しかし一日九リーヴルの小遣いとペンとインクと紙と忍耐

力がありさえすれば、人はたとえ外の空気は吸えなくとも、獄中で不自由なくやっつけられるだろう——すくなくとも一ヶ月か六週間はやっつけられるから、その期間がたてば、その人が悪意のない人間である限り、無実が明らかになって、入獄した時よりも善良で賢い人間となって出獄するのである。

この件を心の中で処理してしまうと、わたしは中庭へ出る何かの用事（何んであったかは失念した）が出来て、理屈で割り切ったことで胸中鼻高々と階下へおりて行ったのを覚えている——物を陰惨な面から描く筆法は最低だ、とわたしは得意になって独りごちた——というのは、人生の諸悪を毒々しく見るに耐えないような色彩で描く力など、わたしは一顧だにしないからである。心は自分が誇張し陰惨に描いたものにおそれおののき、そして本来の形や色合に戻せば、それを見過ごしてしまうのである——わたしは命題を訂正して言った——本当に、バステューユはあなどり難い災害だ——しかし、バステューユから城塞を取り去り——濠を埋め——各入口の防壁をはづしてしまえば——それは単に幽閉にすぎない。そうして病気という暴君が自分を閉ぢこめておくので——人間の暴君ではないと考えれば——災害に見舞われているという考えは消え去り、あと半分の苦しみも幽閉に満足して耐えられるものなのだ。

この独白のさ中に、子供のものと思われるひと声によってわたしはさえぎられたが、それは「ぼく出られないよ」という訴えなのであった——わたしは廊下の上を見たり下を見たりしたが、男も女も子供も別に見当らなかったので、それ以上注意を払わずに戸外に出た。

廊下を歩いて自室へ帰ろうとすると、わたしは同じ声が二度繰り返されるのを聞いた。それで声のする方を見上げると、それは小さな籠の中に入って下げられている椋鳥であることが分った——「ぼく出られないよ」——「ぼく出られないよ」と椋鳥は鳴くのであった。

わたしは立ち止まってその鳥を見ていた。そうすると、廊下を通る人が来るとその度に椋鳥はその近づく方向に羽ばたき、いつもきまって捕われの身を嘆き——「ぼく出られないよ」と鳴くのであった——可愛想に！ とわたしは言った、どんな迷惑をうけてもいいから、お前を外に出してやろう、それからわたしは扉にさわろうと籠をふり向けてみると、扉は針金で幾重にも巻いてあった

ので、籠をばらばらにこわすほかそれを開ける方法はなかった——それでわたしは籠に両手をかけた。

椋鳥は、わたしが逃がしてやろうと苦勞しているところに飛んで来て、じれったそうに格子に頭をつっ込んで胸を押しつけるのであった——可愛想だけとお前を自由にしてやれないよ、とわたしは言った——すると椋鳥は「だめ」と言い「ぼく出られないよ」——「ぼく出られないよ」と繰り返して鳴くのであった。

本当のところ、わたしは自分の愛情がこんなにも優しく呼びさまされた経験はいままでになかったし、また理性などは泡沫にすぎないような浮かれ心が、突然としてこのように真面目な態度に引き戻されたことも、これまでわたしの人生にあった記憶はない。椋鳥の声は機械的であったが、その調子はまことに真に迫っていたので、一瞬にして例のバスチーユについてのわたしの理詰な考えは、すっかりくつがえってしまった。それでわたしは重い気持で階段をのぼり、おりる時口にしていた言葉を一言も口に出さなかったのである。

いくら姿、形を変えようとも、捕われの身は捕われの身なのだ！ とわたしは呟いた。それはやはり苦杯なのであって、古来からいつの世にも多くの人々が苦杯をのまされているが、いつも変りなく苦渋に満ちたものなのである——わたしは自由の女神に呼びかけて、次のように言った。——まことに優しく優雅であられる女神よ、あらゆる者があらゆる態度であなたを礼賛し、あなたの味わいは人情の変らぬ限りいつも心持良いものでしょう——言葉をどうあやつってみても、あなたの雪のように白い打かけを汚すことは出来ず、どんな錬金術の力もあなたの黄金の笏を鉄に変えることは出来ません——いかなる田舎者といえども粗末な食事を食べている時、あなたがお恵みをかけて下さるなら、あなたをその宮廷から追放した帝王よりも幸福なのです——恵み深き神よ！ とわたしは階段の一番上の所にひざまづいて言った——健康を恵み給う神よ、どうかわたしに健康だけをお与え下さい、そして人生の伴侶としてこの美しい女神だけをわたしにお与え下さい——そうして下されば、あなた様の法冠などは神慮のままに、それが欲しくてならない人達の頭の上に雨の如くに降らせて下さい。

捕われ人

パリ

部屋に帰っても、わたしはなお籠の椋鳥のことが念頭から離れなかった。わたしはテーブルに近く坐って手に頭をもたせかけると、幽閉の苦しみをあれこれと想像し始めた。わたしはそれにふさわしい気分にあったので、思うままに想像力をめぐらした。

生まれつき奴隷の身分以外はなんの遺産もない多くのわが同胞のことを考え始めたが、その想像図がどんなに悲惨なものであっても、わたしはそれを身近かに考えることが出来ず、ただ群をなした教多くの哀れな人達がわたしの心を掻き乱しただけであった——

——わたしは具体的に一人の囚人を取りあげ、彼を牢獄の中にとじ込め、それから彼の姿を掴むためにうす暗い鉄の格子戸をのぞき込んだ。

彼の肉体は長い期待と幽閉のために、なかば痩せさらばえているのが眼についたが、希望の実現が延ばされることから起ってくる心の痛みがどんな種類のものであるか、わたしには感じられた。もっととよく見ると、彼は青白く熱っぽかった。二十年もの間、柔かい西風は一度も彼の血潮をあおったこともなく——その間ずっと太陽を見たこともなく、月も見ただけならば、格子窓を通して友達や縁者の声がささやかれるのを聴いたこともなく——彼の子供達の声はなおのこと耳にしたこともなかった——

——しかしこのところでわたしの心は血がにじみ始めた——それでその肖像画の別の部分を引き続けなければならなかった。

彼は地面の上にわらを敷いて坐っていたが、それは部屋の一番奥の所にあり、彼の椅子ともなれば寝台ともなるのであった。そして頭のところに小さな棒切れで作った暦が置かれてあって、それにはいたる所に、彼が獄にあって過した淋しい昼と夜とが刻みつけられてあった——そして彼はこうした棒切れの一本を手を持って、おびただしい刻みの上にもう一日哀しみの日を錆釘でほりつけていた。見ているわたしの姿が彼を照らす小さな灯りをさえぎって暗くした時、彼は扉の方に絶望的な眼をあげ、それからまた眼を伏せて——頭を振るとその

苦しい仕事をまた続けるのであった。彼が小さい棒切れを棒の束の上におこうと身体をまわした時、脚についている鎖の鳴るのが聞えた——彼は深いため息をつき——幽閉の苦しみが彼の魂にくい込むのを見る思いがした——わたしは思わず涙がこぼれて仕方がなかった——わたしは空想が描いていた捕われの画に耐えられなくなった——椅子から立ち上るとラフルールを呼び、貸馬車をかり明朝九時までに宿の玄関にとめておくように言いつけた。

——自分でショワズール公爵様の所へ直接行ってみるよ、とわたしは言った。

ラフルールはわたしの床に入る世話をしてくれるところだったが、この正直な男の心を痛めるようなわたしの頬の様子を見せたくなかったので——自分で寝るかからいいと言って——彼ももう休むようにと命じた。

椋鳥

ヴェルサイユへの道

定刻にわたしは馬車に乗り込んだ。ラフルールは後部に乗って、わたしは御者に全速力でヴェルサイユへ行くように命じた。

この行く道には何もなかったの、いやむしろわたしが旅をして求めるようなものは何もなかったの、この章の空白は、前章の主題となったあの同じ椋鳥の短い物語で埋めるのが一番良いと思われる。

或る紳士がドーヴァーの港で風の変るのを待ついていた時、その椋鳥はまだよく飛べなかったの、その紳士の従者であったイギリスの若者に断崖の上で捕らえられたのであった。その若者は鳥を殺すにしのびなかったの、ふところに入れて便船に持ち込み、そうして餌をやったりして一度その世話をすると、二、三日で可愛いくなってしまい、無事パリまで連れて来てしまったという訳である。

パリでは、その若者は一リーブル出して椋鳥に籠を買ってやり、彼の主人がパリに滞在していた五ヶ月の間、そのほか別にすることもなかったの、母国語で四つの簡単な単語⁽²⁾を椋鳥に教えこんだ——（それ以上は教えなかった）——そしてこの言葉にはわたしは大きな恩義を受けたことになる。

彼の主人がイタリーに出かける時に、若者はその椋鳥を宿の主人に呉れたの

であった——しかしこの小鳥の自由を求める鳴声は、パリでは通じない外国語であったので——椋鳥は宿の主人に殆んどかまわれなかった——そこでラフルールが鳥と籠とをバーガンディ葡萄酒一本でわたしのためにゆずり受けたのであった。

イタリーから帰国する時、わたしはこの鳥をその覚えた歌の言葉が話されている国イギリスへ連れて帰り——その小鳥の話をA卿に話すと——是非それをゆずってほしいと言われ——それから一週間するとA卿はそれをB卿にやってしまい——B卿はC卿に贈物とし——C卿の近くに仕えている人がD卿のおつきの人に一シリングで売ってしまい——D卿はそれをE卿にくれてやり——それから次々に——アルファベットを半分もまわって——貴族院の階層から下院の階層にゆずられ——下院の同数の平民の手に次々に渡された——しかしこういう連中は貴族階級の仲間に入りたがっているが——わたしの椋鳥は出たがっていたのである——その鳥はパリにいた時と同様にロンドンでも殆んど大事にされなかった。

読者の中には、この椋鳥のことを耳にされた人が多数おられるに違いない。そしてもし偶然その鳥を御覧になったとしたら——失礼ながらお知らせしておくが、それはわたしの鳥なのであって——或いは、似せて作られ本物には大分劣っている代物なのです。

その時以来、わたしはこの哀れな椋鳥をわが家の紋章としているということのほかは、この上つけ加えることは何一つない——その紋章は次の通り⁽³⁾。

——そうして紋章官である方々よ、この椋鳥の首をひねりでもしたなら、絶対に許しませんぞ。

挨拶

ヴェルサイユ

わたしは誰からでも保護を求めようとする時には、敵に自分の心を見すかされたくはない。そういう理由で、わたしはいつも自分を護ろうと努力している。しかし今度C……公爵家への訪問はやむを得ない行動であって——もし好きで

する行動だったら、ほかの人と同じようにわたしも振舞ったであろう。

行く途中わたしの下等な心は、何種類もお世辞に満ちた挨拶を色々考えあぐねたものである！ そういうものを一つ考えただけでも、わたしはバスチーユのへ監獄送りに値したほどだ。

ヴェルサイユが見える所まで行った時、ほかに何んにも手がなくなって、ただ単語や文句の切れっぱしを集めて、C……公爵様の御慈悲に取り入るための態度や調子をでっちあげるだけだった——これでいいさ——とわたしは言った——それからすぐ、無鉄砲な洋服屋が寸法も取らずに服を作って、公爵に届けるようなもんだ、と言い返した——馬鹿めが！ と続けてわたしは言った——まづ公爵のお顔を見て——どんな性格がうかがえるか観察してみたらどうだ、それからどんな態度でお前の言うことを聴くか注意してみろ——それに公爵の身体の手足の動きや表情を気をつけて眺めてみろ——そして口調についていうと——公爵の口をついて出る最初の言葉の響きで分るものだし、そういったものの全部の中から、公爵の気嫌をそこねない挨拶をすぐその場ででっちあげる——そうすれば薬は公爵自身が作ったものだから、うまく喉を通して落ち着くものだ。

なる程！ そして無事にすんでくれればいいんだが、わたしは言った——また臆病風を吹かしたか！ 地球のいたる所で人間と人間とがまるで対等でないみたいだ、そして野原で人と人とが顔をつき合わせて向いあえるなら——同じように部屋の中でもどうして対等に向いあえないのか？ 本当だぞ、ヨーリック、人と人とが対等に向いあえない時には、人は自分を偽っているのに、自然のままに振舞えばいいのに、十度も自分を助けにくる者を裏切っているのだ。バスチーユの囚人のような顔をして公爵の許へ行ってみろ、きっと三十分もたつと、囚人としての警護がついてパリに送り返されることは受けあいだ。

確かにそうだ、とわたしは呟いた——それじゃ誓って！ この世のありたっけの陽気としとやかさを態度にあらわして公爵の所へ行こう。——

——それでもまだお前は間違いをしているよ、とわたしは心の中で答えた——ヨーリックよ、落ち着いた心というものは極端に走るものでなく——いつも中庸にあるんだ——ようし！ よし！ 御者が門から中に入った時、わたしは

叫んだ——うまくやってやるぞ。そして御者が中庭を廻って玄関前に馬車をとめた時までには、わたしは自分に与えた訓戒のために非常に調子が出てきたので、階段のてっぺんで自分のいのちとおさらばする囚人みたいに悄然と階段を昇って行くことはしなかった——それにまたエライザよ！ わたしの生命ともいうべき君と会いたい一心で、君の所に飛んで行く時のように、跳んだり、二段一度に駆けあがったりもしなかつたよ。

応接間の扉から中に入ると、この家敷の家令か、むしろ秘書の一人という様子をした人に迎えられたが、その人は公爵が多忙であることをわたしに述べた——わたしは謁見を賜わる正式の手続きもまったく知らない、見ず知らずの外国人であり、しかも現在の国際情勢では一層悪いことにイギリス人なのです、とわたしは言った——そんなことは別にかまいません、と彼は答えた——わたしはちょっと礼して彼に言った、公爵様に重要なお話があって参ったのです。その秘書はわたしをそのままにして、この事を誰かに伝えようとする風に階段の方を見た——しかし誤解なさるといけないのですが、とわたしは言った——と申しますのは、わたしがお話しなくてはならない事は、C……公爵にとってはすこしも重要なことでは御座いませんで——わたし自身にとって非常に重要なことなのです——『それなら話が違います』と彼は答えた——男気のある人にとっては全然そんなことはありませんよ、とわたしは言った——ところであなた、初めての者はいつ頃御謁見を賜わる事が出来るのでしょうか？ と続けて言った。彼は時計を見ながら答えた、二時間はたちませんと。庭先にある馬車の数からみると、わたしが二時間以内に引見される望みがないという予測は、正しいものであると思われた——そうして話す相手もなく応接室の中を行ったり来たり歩いていることは、バスチーユその中にいるのと同じように居心地が悪かったので、わたしはすぐに馬車に戻って、一番近いホテルであるコンドルブルーまで行くように御者に命じた。

こういうことには宿命的なものがある、とわたしには思われる——つまりわたしはどうも目指す予定地にめったに行きつけないのである。

ヴェルサイユ

通りを半分も行かないうちに、わたしの気が変わった。ヴェルサイユの町に来てるのだから、町を見物するのも当然面白かろうと考えたので、綱を引いて合図をし、町の主な通りをいくつか廻ってくれと御者に言いつけた——この町はたいして広くないだろう、わたしは言った——ところが御者は、失礼ですが違います。ここはとっても素晴らしい町でして、一流の公爵、侯爵、伯爵様のお屋敷が目白押しに並んでいます、と話してくれた——すると昨晚コンテイ河岸の本屋がひどくほめていたB……伯爵のことがすぐに頭に浮んだ——それじゃB……低爵をお訪ねして一部始終を話してみてもいいではないか？ とわたしは考えた、伯爵はイギリスの書物とイギリス人を高く評価しているお方なから——そこで再びわたしは気が変わったが、正確に言えばそれは三度目だった。というのは、今日という日はサンピエール街のR……夫人訪問に予定し、必ずお伺いいたしますという伝言を小間使いにうやうやしく話してあったからである——しかしわたしは状況に支配される癖があって——状況を支配することは出来ないのである。そこで、通りの向う側に何かを売っているように籠を持って立っている男が見えたので、ラフルールに言いつけて、その男の所へ行って伯爵のお屋敷はどこかを訊ねさせた。

ラフルールはすこし蒼ざめた顔をして帰ってくると、あすこで「^{パイ}」を売っているのは聖ルイ勲爵士であると話した——ラフルール！ そんなばかな、とわたしは言った——ラフルールもこの事態をわたし同様説明出来なかったが、彼が見てきた話を頑として曲げなかった。彼は、金をちりばめた十字章が赤いリボンでボタン穴に止めてあるのを見たし——それから籠の中をのぞき込んでみると、勲爵士の売っている「^{パイ}」が見えたのだから、事実間違いはない、と言うのである。

人の人生にみられるこのような非運は、好奇心よりももっとけ高い精神を呼びさますものである。わたしは馬車に乗ったまま、しばらく彼を見つめないではいられなかったが——彼と十字勲章と籠とを見つめれば見つめるほど——ますます強くそれがわたしの頭の中に織り込まれるのであった——わたしは馬車をおりて、彼の方へ歩いて行った。

彼は膝の下まで垂れている清潔なリンネルのエプロンを腰にまとして、胸の上半分に達する胸当てのようなものをつけていたが、この一番上のところ、縁どりからすこし下のところに十字章を下げている。小さな「パイ」を入れた籠は、白い綾織りのナプキンでおおわれ、同じものがもう一枚底に敷いてあった。すべてに「小ぎれい」できちんとした感じがあったので、誰しも食べたさからも人情からも、この人から「パイ」を買いたくなつたであらう。

彼は別に食欲や人情で誘って「パイ」を人にすすめるでもなく、屋敷の角にただ立っていて、押し売りをしないで、よろしかったら買って下さいという態度であった。

彼は四十八才ぐらいで——なにか厳肅に近い真面目な表情をしていた。わたしはそれもその筈だと思った——わたしは彼の所、というよりも彼の籠の所へ行ってナプキンを取ると、「パイ」の一つを手を取った——そしてわたしを感動させたこの事情を是非話してくれるよう頼んだ。

彼は次のように手短かに話してくれた。人生の大部分を軍隊で過したが、そこで僅かばかりの遺産をつかひ果したあとで、一隊の兵士をあずかる階級と十字勲章を手に入れたのであった。しかし最近の平和条約の統結と同時に、彼の聯隊も編成変えになり、ほかの聯隊とともに彼の隊全部も給与が貰えなくなり、——彼はこの世で一人の友人もなく一リーブルもない状態におかれてしまった——本当にこれ以外——（と言って、彼は十字章を指さした）——何んにもないんです、と彼は言った——この哀れな勲爵士にわたしは同情を禁じ得なかったが、その話を終えた時、彼はわたしの尊敬の念をも獲得していた。

王様は非常にお恵み深い方です、と彼は言った——しかし王の恵み深さも誰をも救ったり誰にも報いたりすることは出来ません。そしてわたしの不幸なのは、恩賞もれの組みに入ってしまったことなんです、彼は続けて言った、わたしには愛している若い妻がいます、彼女が「パイを作つて」いるのです。そしてつけ加えて言った、わたしはこんなことをして妻と自分を窮乏から守っていることを不名誉なこととは思っていません——神の御心はわたしにもっと良い仕事を与えて下さらないのですから。

世の善男善女から楽しみを奪うのは人の悪いことだらうから、九ヶ月ばかり

後にこの哀れな聖ルイ勲爵士におこった出来事を忘れずに話しておこう。

彼はいつも王宮に通じる鉄門の近くに場所をとっていたようで、そのために彼の十字勲章が多くの人達の目にとまり、その人達はわたしと同じような質問をしたのである——彼は同じ話をいつもきわめてひかえめ目に、分別をもって語っていたので——それがついに王のお耳に入ることとなって、王はこの勲爵士が勇敢な軍人であり、聯隊中の人々に清廉潔白な武人として尊敬されていたことをお聴きになって——千五百リーブルの年金を御下賜になり、彼のささやかな商売をやめさせたのであった。

読者を喜ばせようとこの話を語ったのだから、わたし自身を喜ばすために順序は不同ながら別の話をするのを、わたしにお許し願いたい——というのはこの二つの話はお互いを照し合うので——別々にしてしまうのに忍びないからである。

劍

レンヌ

国家や帝国もそれぞれの衰退の時があり、その時がくれば苦しみや貧しさの何たるかを味うのだから——わたしはここで、なぜブルターニュのE……侯爵家が次第に没落して行ったか、その原因を語ることはしないでおく。E……侯爵は、祖先がむかし栄えていた頃の夕残りをすこしでも留めてそれを世に示したいと、毅然として現在の状況と戦っていたが——先祖達の思慮の無さは、それをもう彼の手に負えないものにしていった。世をしのんで暮すささやかな経費には充分足りるほどの財産が残されていたが——彼には二人の息子があって、その子供達は父に「世に出て」暮すことを期待しており——父も二人がそう考えることを無理もないことと思っていた。侯爵は軍職について世に出ようとしたが——それによって道を拓くことは出来なかった。それは「支度」にあまりに金がかかりすぎ——単なる節約くらいではそれに当てることは出来ず——商売でもする以外にほかになんの金ずるもなかったのである。

ブルターニュ以外のフランスの他の州では、商売をすることは侯爵の誇りと愛情とが、再び花咲かせようと望んでいる小さな樹木の根を永遠に切りとって

しまうことであつた——ところがブルターニュでは、この事を認める法律規定があるので、彼はそれを利用することが出来た。ブルターニュの五郡の代表がレンヌに集まる機会に乗じて、侯爵は二人の息子を供なつて法廷に入ると、公国にある古い法律の権利を請願して、この法律は今ほめつたに要求されないが、今尚効力はあることを述べた。そして腰から剣を取つて彼は言つた——さあ——これを収めて下さい。家運が再興して再びこの剣をつけることの出来る状態になるまで、大事にあづかつておいて頂きたい。

判事は公爵の剣をあづかつたが——侯爵はその剣が侯爵家の公文書保管所に登録されるのを見とどけるためしばらく留つていた——それから退出した。

侯爵と家族全部は、翌日マルチニーコ⁽⁴⁾に向つて船で出発して行つた、そして約十九年か二十年間商売に精を出して成功を博し、また侯爵家の遠い親戚から思いがけない遺産も入つて——遂に貴族の身分を回復しそれを維持しようと帰国したのであつた。

これは多感な旅行者でなければ、どんな旅行にも決しておこることのないような幸福な出来事であつた、というのはこの厳肅な剣の引渡要求が行われた時に、わたしはレンヌの町にいたからであつた。あえてわたしは「厳肅な」というが——それはわたしにとって正にそうだったからである。

侯爵は家族をみんな従えて法廷に入つて来た。彼は夫人を支え——長男は妹を支え、一番下の男の子は反対側にいて母によりそつていた。——侯爵はハンカチを二度顔に押しあてた——

——法廷は静まりかえつていた。侯爵が法官席の六歩以内の所に近づいた時、夫人を一番末の息子にまかせて、家族の前三歩の所に進み——剣を返還してくれるよう要求した。剣が与えられた、そして彼はそれを手に持つと直ちに刀身をほとんど鞘から抜きかかつた——それは彼が一度見捨てた友の輝く顔であり——それが變つていないかを確かめるかのように、柄からずっと注意深く刀身を見ていった——そして切先に近くすこし錆が出ているのを見てとると、彼は刀身を眼に近よせて、顔をその上に傾けた——その時涙が一しづく錆のところに落ちるのをわたしは見たように思つた。次におこつたことからみても、わたしは間違つていなかったと思う。

「この錆をおとす何かほかの方法を見つけよう。」と彼は言った。

侯爵はそう言うと刀を鞘に収め、剣をあづかっていた人達に一礼し——それから妻と娘と二人の息子を従えて退出した。

わたしは彼のこの時の気持を、どんなにか羨やましいと思ったことだろう！

旅券

ヴェルサイユ

B……伯爵には簡単に面会が許された。シェークスピア全集が一セット机の上に置いてあって、伯爵はその本をあれこれ引っくり返して見ているところだった。わたしは机に近より、先づ自分はその作品の内容をよく知っていることを伯爵に分らせるような表情で、その本を見つめた——わたしは紹介者も無しにやって参りましたが、伯爵様のお部屋できっとわたしを紹介してくれる友人に会えると思っておりました、わたしは言った——そしてその全集を指さして言った『その人とは、わたしの同国人であるあの偉大なシェークスピアなのです』『親しい友よ』とシェークスピアの霊に呼びかけながら、わたしはつけ加えた。『面倒でもわたしを御紹介下さい。』——

伯爵はこの紹介の奇妙さにほほえんだが、わたしの顔色がすこし悪く身体の調子の良くない様子を見てとると、肘掛椅子に坐るようにとしきりにすすめてくれた。それでわたしは腰を下ろし、こんなにも作法を無視した訪問について伯爵が色々と臆測される労をはぶくために、わたしは本屋での一件のことを簡単に述べて、そのことによって、わたしは今直面している一寸した難題を持ってフランス人の誰よりも先ず伯爵をお訪ねしようという気になったことを話した——ところで、あなたが困っていることとはなんですか？ わたしに聞かせて下さい。と伯爵は訊ねられた。それでわたしはすでに読者にお話したのと同じ話を伯爵に語ったのであった——

——話をしめくくってからわたしは言った、伯爵様、それで宿の主人はわたしがバステイユへぶち込まれるのは是非もないことと思っているんです——そして続けて言った、しかしわたしは全然心配しておりません——と申しますのは、わたしは世界で最も洗練された国民の手中にあるのですし、またわたし

は嘘いつわりのない人間で、この国のあからさまな情勢を探ろうとやって来た者でもありませんので、死ぬも生きるもこの国の人達次第、といった風には考えておりません——それに伯爵様、病人に不利益になるような意気を示すのは、フランス人の心意気にそぐわないことです。

わたしがこう言うと、伯爵の頬に生き活きとした赤味がさして——『心配しないで』——心配には及びませんよ、と彼は言った——実際のところ、わたくしは心配しておりません、とわたしは答えた——それにわたくしはロンドンからパリまでずっと笑いながらやって来たのです——とすこしふざけた調子で続けた、そしてシヨワゼール公爵様は、わたくしを泣きの涙で追い返す程陽気さの敵であるとは思いません。

——B……伯爵様、わたしの願いは（低くお辞儀をして言った）公爵様がそんなことをなさらないようお願いして頂きたいのです。

伯爵は非常に優しくわたしの言うことを聴いてくれたが、そうでなかったらわたしは話の半分も言えなかったろう——そして一度二度『成程』と言ってくれた。それでわたしは自分の訴えをそこでやめて——その事についてはそれ以上言わないことに決心した。

伯爵は自分で話を進めてくれた。それでわたし達は——書物のこと、政治のこと、男性にについてのこと——それから女性のことなど——平凡な話題について語り合った——女性の上に神の御恵みがありますように！ 女性について色々話し合った後でわたしは言った——地球上にわたくし程女性を愛す男はおりません。女性のあらゆる弱点を見、女性についてのあらゆる諷刺を読んだ後でも、わたくしは尚女性を愛すのです。と申しますのは、全女性について愛情をいただくことの出来ない男は、ただ一人の女性を本当に愛すことは出来ないと確信しているからです。

『成程！ イギリスのお方』と伯爵は楽しそうにおっしゃった——あなたはこの国のあらわになっている所を探りに来たのではありませんね——あなたを信じますよ。それからまた。この国の女性のあらわになっている所を探りに来たのでもありませんね——それでわたしに推察させて頂けば——『偶々』女性があなたの目の前に現われても、そういう考えをおこすことはありませんでし

よう。

わたしの心の中には、たとえ非常にささいな、それとなくほのめかす卑猥なことにも衝撃を受けて耐えられないものがある。雑談を楽しんでいる時には、わたしはこれに耐えようとよく努力してみたり、ひどい苦痛を味いながらも、十人の女性の集まっている所で色々冗談を思い切って言ってみたりしたが——その冗談の万分の一さえ、たとえどんな幸せが得られても、一人の女性には言うことが出来ないのである。

伯爵様、失礼ですが、とわたしは言った——あなたのお国のあらわなものについて言えば、もしそれを見ますればわたしは涙をためてそれを眺めるでしょう——そしてお国の女性に対しては（彼がわたしの心に引きおこした考えに赤くなって）わたくしは非常に福音主義的なところがありますし、女性の弱点であるものに共感を覚えていますので、やり方が分っていれば、その上に衣服をかけてあげたいと思います——わたしは続けて言った、しかし出来ましたら女性の心のあらわなところは探りたいと思います。そして習慣、気候、宗教などで様々に仮装したものを見通して、自分の心の規範とするために、女性の心の立派な点を発見したいのです——その為にこそわたくしはやって来たのです。

さらに言葉を続けた、伯爵様、この為にわたくしはまだパレロワイヤルも——ルユクサンプル宮殿も——ルーヴル宮殿の正面も見ていませんし——絵画や彫像や教会についてのカタログも集めようとしません——あらゆる美人は一つの伽藍だと考えます。それでラファエロの「キリストの変容」を眺めるよりも、美人という伽藍の中に入って、そこにかかっている原画やきままなスケッチを眺めたいのです。

わたしは続けて言った、この渴望は、美術愛好家の胸をこがすものと同じように、やもたてもたまらないもので、この為にわたくしはイギリスからフランスに参り——これからフランスを通過してイタリアへ行くのです——これは自然な人の心とそこからわきあがる愛情とを求めて歩く静かな心の旅路なのです——そしてこの愛情というのは今よりももっと人間をお互いに愛させ——またこの世の中を愛させるようにするものなのです。

伯爵はこれを聴くと、非常に多くの親切な言葉をかけて下さった。そして、

わたしと知り合うようになったことで、どんなにシェークスピアに感謝しているかを丁寧につけ加えた——しかし「^ア「^フついでに^ゴ言え^スば」と彼は言われた——シェークスピアには偉大なものが溢れているが——紹介するのにあなたのお名前を告げる一寸とした社交的儀礼を忘れましたね——ですからあなた御自身で名乗って頂かなくてはなりません。

旅券

ヴェルサイユ

この世でわたしには誰かに自分の名前を名乗ろをとすること程厄介なことはない——というのは、わたし程にどうやっても賞められない人間はいないからである。それでわたしはよく一言で自己紹介して——それで終りにしたいと願ってきた。ところが、この時がわたしの人生でこの願いをどうにか成し遂げた唯一の機会だったのである——それは、シェークスピアの作品が机の上に置いてあって、わたしがその中にいるのを思い出したからで、わたしは「ハムレット」を取りあげると、すぐに五幕の墓場の場を開けてヨーリックという字を指で押え、そのまま名前の上に指を置いてその本を伯爵に差し出し——『ここにわたくしがおります！』と言った。

ところが哀れなヨーリックの頭蓋骨のことは、わたし自身の頭が目の前に実在しているせいで、伯爵の念頭から消えてしまったのか、或いはなにかの魔法で七、八百年の年月を消してしまったのか、それはこの話のくだりには別に関係がないのだが——とにかくフランス人が物事を総合的に判定するよりも思い付きで判断することは確かである——わたしはこの世の何んにでも驚かないし、ましてこんな事には尚更驚かない。というのは、そのお方の公正さと家長的な温情さとをわたしが崇拜してやまないわがイギリス国教会の筆頭の方が、いまと同じような時に、同じような誤りをしたからである。——

そのお方はこう言われたものだ「デンマーク王の道化師が書いた説教集⁽⁵⁾なんて読むに耐えんよ。」——さようでも、猥下！ とわたしは答えた——しかし二人のヨーリックがいるのです。猥下のお考えになっておられるヨーリックは、八百年前に死んで埋められております者で、ホーウエンディラスの宮廷

で大活躍いたしました——もう一人のヨーリックがこのわたくしでして、ただわたくしはどんな宮廷でも活躍したことは御座いません——それでも猊下は頭を振って認めなかった——これはどうも！ とわたしは言った、猊下、それではアレキサンダー大王と銅鍛冶屋のアレキサンダーとを混同されるのと同じで御座います——猊下はこう答えられた、それは全く同じ者だよ——

——そこでわたしは言った、もしマケドニアのアレキサンダー大王が猊下を御転任されることがお出来になったら——そうはおっしゃらなかったでしょう。

お気の毒なB……伯爵もこの同じ誤りにおちいられたのである——

——『君がヨーリックですか？』伯爵は大声で言われた——『そうですが』とわたしは答えた——『君が？』——『わたくしがです』——『伯爵様、あなたに申し上げているこのわたくしがです』——『へえ！ 君がヨーリックですか』——と彼はわたしを抱きしめて言った。

伯爵はすぐにそのシェークスピアの本をポケットに入れると——わたしを独り部屋に残したまま出て行った。 (続く)

註

- (1) 今回から作中に出てくるフランス語には、やむを得ない限りルビを振らず、二重カギとした。理由は、スターンのフランス語に不正確な点があることと、発音ルビを振る繁雑さのためである。
- (2) 単語 “I can't get out” の四字。
- (3) 原文ではこの後に椋鳥を頭にいただいた紋章の図柄が大きく示されているが省略した。尚 Sterne という姓は Sterling に由来すると云われ、昔から椋鳥の紋章を使用していた。
- (4) マルチニーコ 西印度小アンチル列島中の仏領マルチニックを指す。
- (5) 説教集 Sterne は *The Sermons of Mr. Yorick* vols. 1. II (1760) vols III, IV (1766) という説教集を出版している。